

新・俺と蛙カワズさんの
異世界放浪記

くす
もち

キング

魔法国家ガーランドを治める
偉い王様。実は双子。
無類のロボ好き。

タリオン

太郎が造った巨大ロボ。
コンセプトは
「昭和ロボよ永遠に」。

このたる 紅野太郎

本作の主人公。カワズさん
によって異世界へと召喚された。
魔力は800万1000。

カワズさん

自身の命と引き換えに太郎を
召喚した魔法使い(500歳)。
太郎によってカエルの姿で
蘇生させられる。

あまみや 天宮マガリ

あだ名はセーラー戦士。太郎の
おかげで地球と異世界を
行き来できるようになった。

カニカマ君

異世界から召喚された
中学生勇者。とある事件が
きっかけでこのあだ名に。

聖剣エーリュシオン

たまにしゃべるかついい聖剣。
無限にカニカマを出せる。

ミケさん

猫の村に住む
猫獣人のおっさん。
ギャンブル好き。

主な
登場人物

プロローグ

その世界には、不思議な力を操る者たちが存在していた。

彼らは身体の中を満たす魔力を使い、様々な現象を引き起こすことができた。

炎を操り、すべてを焼き尽くし。

水を操り、すべてを潤し。

風を操り、すべてを切り裂き。

大地を操り、すべてを包み込む。

生きとし生けるものの精神すら操るそれは、まさに奇跡の力。

それを、人は魔法と呼ぶ。

そしてその魔法を誰より自在に操り、誰より探究する者を、畏敬の念を込めて――。

――魔法使いと呼んだ。

これから始まる話は、ある魔法使いにまつわる物語である。

物語ではあるが……。

彼は、少し変わった魔法使いである。

そのことは、まず言っておかねばならないだろう。

1

俺、こうのたろう紅野太郎は魔法使いである。

黒髪黒目の日本人、ジーンズと黒いシャツはトレードマーク。……として定着しているのかどうなのかは微妙である。

そう、俺はことは別の世界からやってきた異世界人だ。

こっちに来た当初は苦勞があつたものの、今はそれなりに楽しみながら魔法使いをやっている。

そんなこんなで俺は、今日もマントに身を包み、この世界をふらふらと旅していた。

「あーいやよかつたよかつた、無事に話がまとまって……」

本日^{今日}の成果に、ほっと胸をなで下ろす俺。

というのも、魔法で作りに出したパソコンを一台配ることを今日のノルマとして課していたからだ。パソコンの普及活動はもうずいぶん続けていて、異世界なのにすでにネットワークが機能してい

るくらいには広まってきた。

地道な活動の成果が出てきたことは、素直にうれしい。

だがそれはそれとして、見知らぬ村にパソコンを持って行けば、当たり前のように歓迎されるわけはない。

謎の魔法使いが、怪しい箱を持ってきているのである。

怪しさがより増すだけだ。

今日も今日とて、俺の魔法で願いを一つ叶えてあげるといあらむぎ荒業を使って、無理やりパソコンを受け取ってもらったというわけだった。

「いやー、もうホント、魔法がないとどうしようもないだろう、これ」

どんな無理難題の願いをされるのかは運しだい。

無理難題と言つても、今のところまだ常識の範囲内で収まっている。とはいえ、こんなやり方を続けていれば、そのうちとんでもないことを願われたりしそうである。

というわけで――。

結構な緊張感から解放された俺は、今ちよつと休憩中である。

俺は特に何をするでもなく、街道をぼんやりと歩いてた。

なんだかんだで好きでやっている旅である。別に急ぐ理由なんてありはしない。

「ただ、だらだらと隙だらけで歩く俺の姿は、いかにも弱そうに見えたのだろう。そういう隙が思ってもみないトラブルを招き入れてしまったようだ。」

「うげ……。マジか？」

「陥ったその状況に、俺は思わず顔を顰める。」

「へっへっへ。兄ちゃん。わりいが身ぐるみ全部置いてってもらうぜ？」

「素直に渡すなら命までは取らねえでおいてやるぜ？」

「ひゃっほー！ しばらくぶりの獲物だぜ？ げへへへへ！」

「げへへへ！ なんて笑い方、初めて生で聞いたよ。」

「初の強盗体験は、むしろ新鮮な驚きがあった。」

「……あーつとその、暴力反対」

「そう言いながら、さて、どうしたものかと俺は頭をひねった。」

「強盗の数は三人。」

「武器こそ持っているが、どれも刃こぼれしていて、とても強そうには見えない。」

「その他の装備もぐちゃぐちゃで、拾ったものを無理やり組み合わせたらあんなふうになるのだろうという感じである。」

「とりあえず俺も腰の剣を抜いてみたが、別にやつつけてやろうとか、そういうわけじゃない。」

「単純に何か持っていると安心する、物が飛んできたから反射的に手を前に出してしまった、そん

「な反応に過ぎなかった。」

「……あつ、しまった」

「あらかじめ剣にかけられていた魔法は、そんなことでもきっちり発動してしまうのである。」

「シャキンと剣が抜かれた瞬間、俺の身体は勝手に動き出す。」

「何とも気持ちの悪い人間離れた動きでカクカクと、しかし目にも留まらぬ速度で、俺は強盗たちの間をすり抜けた。」

「……はっ！ やっちまった！」

「気がついたときにはもう遅い。」

「剣の魔法は、情け容赦なくその効果を発揮していた。」

「このときかけられていた魔法その一。」

「敵に最短の動きで、自動で斬りつける魔法。」

「……ぐふああー！」

「……なんだとうろううー！」

「……あんな弱そうな奴にいいい」

「とにかくリアクションのいい強盗たちに脱帽である。」

「もちろん普通の剣で斬りついたりすれば、本当なら凄惨な光景になっていたはずだが、そんなことにはならないので安心してほしい。」

「ぐおおお！ 身体が動かかねえ！」

「どうなってやがるんだ！ 指すら動かかねえ！」

「……ちよつと気持ちいい」

彼らは傷一つ負っていないが、しびれて動けないのだ。

三人が三人とも、地面に転がりピクピクしている。うち一人は恍惚の表情を浮かべているが。

剣の魔法その二。

斬つても傷つけず、麻痺させる魔法。

ちなみに痺れさせるのは、あくまで武器としての体裁を保つためだけに付加された、申し訳程度の機能。

そして極めつけが、その三だった。

「うわあ……、なんかゴメン」

これは自分で剣にかけておいてなんだが、申し訳なさでいっぱいになった。

斬られたら笑顔になる魔法。

三人の周囲には、何とも和やかな光がほわほわと浮かんでいた。

今にも「ほわわくん」とでも聞こえてきそうなそんな光の中、彼らは皆一様に笑顔なのだ。

髭面の男たちがそろつて地面に倒れ伏し、幸せそうな笑顔。

それは、絶望的に悪夢な光景だった。

「……やっぱこれはないかもしれない」

俺は愉快とはほど遠い気持ちになりながら、その場から逃亡した。



彼、紅野太郎はこの世界で起きるおおよその騒ぎの中心にいる人物である。

本人のミヨンミヨンと元気に動く頭のとつぺんの毛同様、訳がわからない存在と成り果てているが、人は彼のことを魔法使いと呼ぶ。

ただ彼は、魔法といえは定番であるはずの、火の魔法も水の魔法も滅多に使わない。

そんな者は魔法使いではない。そう言われてもおかしくはないほど、魔法使いらしさとは無縁なのだ。

しかし、彼こそが真の魔法使いだと、そう主張する者も少なくない。

それほどの規格外。万能の魔法を彼は操る。

その力は、彼が元々この世界の住人ではないという事実に関係している。

近くて遠い、別の世界からやってくる異世界人は稀に存在する。

彼の場合は、彼を引きずり込んだ魔法使いがいた。

その魔法使いは正規の手順を踏まず、ただただ自分の魔法を受け継がせるためだけに、太郎を召

喚した。

太郎にとっては、いわば諸悪の根源とでも言うべき存在だが……。その魔法使いもまた優秀ではあった。



ローブを着た緑色のでっかい蛙姿のわしは、魔法のアイディアに行き詰まって、何も考えずに部屋の天井を眺めていた。

わしは今「カワズさん」などと呼ばれ親しまれているが、もうすでに長いこと魔法使いをやっている、結構偉かったりする。

無茶な魔法を使って、完全に死んだはずだったが、どういふ運命のいたずらか蛙の姿になって生き返っていて、こうやって魔法をいじくり回して研究を続けている。

そんなよくわからない運命を放つてよこしたのは、わしが呼び出した異世界人だった。

その異世界人の小僧、タローにわしが視線を向けると、タローは心底難問に突き当たったという表情で見返してきた。

そして、いつものように馬鹿な発言をし始めたわけだ。

「そういえば結局さ？ カワズさんって何歳なんだろう？」

「は？ だから五百歳だと言ったろうか？」

それは本当に思いつきとしか思えない質問だった。

わしは意図するところがわからずに首をひねって答えたのだが、タローもまた首をひねってそうじゃないと言っつ。

「それは前世の年齢でしょ？ つまりさ、享年五百歳ってことだろう？」

「……まあそうじゃな」

「生き返らせたあとも、同じカウントでいいのだろうか？」

「……」

わしは質問のあまりの馬鹿馬鹿しさに、完全に言葉を失っていた。

正直、死ぬほどごつでもいい話である。

しかし、そう言われてみると、ちょっと気になってしまったことも否定すまい。

わしは、確かに五百年生きてきた。

今もその記憶はあるし、五百年来の知り合いもいるのだから間違いない。

しかし、わしは黄泉の国に魂まるごと一度入っている。

奇跡的に生還を果たしたものの、今は蛙の姿……。これって生まれ変わったことになるんじゃないだろうか？

「……となると、生き返ってから年齢を数え直すのが正しいのか？ しかし髭とか生えとると、昔

の面影おもかげもあるからのう。この容姿になってるのはわしの魂の影響じゃろう？」

わしは生えている髭を持ち上げてごく当然のように主張したが、なぜかタローは首を横に振った。「いやいや。魂の影響がないとは言わないけどさ、カワズさんが生き返ったときは、ただのかい蛙だったよ？ 髭とかない、ツルツルの」

「……嘘じゃろ？」

「ホントだよ」

なかなか衝撃的だった。

震えるわしに、さらにタローは続ける。

「今だから言うけど、髭だってその体形だって、今の見た目になってるのは、どちらかといえば俺のイメージのせいかな？」

「ええええ、どんなイメージなんじゃよ。蛙の爺じいさんって……」

「蛙は純粋じゆんすいに生贄いけぬえのイメージだってば。それに、まあいろいろくっ付けたことで、今のカワズさんのビジュアルが確立されたわけだ」

「もう少しがんばって、元のわしの姿にできんかったもんかのう」

「元の姿より蛙のほうが、正直親しみが湧いたからかな？」

「おう」

わしは、タローのあまりの適当さ加減に改めて戦慄せんりつした。

わしが目を覚ましたときには、すでにこの格好だったのだ。

髭もあつたし、生前の面影が露骨に出っていたので、もう少しマシな理由でこの姿になったと思っていたのだが。

わしはほそりと呟いた。

「……どうせならもう少しかつこ良くしてくれりゃいいものを」

わしとてそれが無理だったことは重々承知していたが、一応言ってみた。

タローはポリポリと頬を掻きながら主張する。

「そんな余裕がどこにあったと？ 俺はあるとき、魔法のど素人もいいところだったんだぞ？」

「そりゃそうじゃけどな」

わしは素直すんじゆくに頷いた。

こいつなら蛙を人間にすることもできたような気もするが……。まあ、そこまで求めるのは理不尽りふじんというものだろう。

そもそも、どこともわからないこの世界に、タローを引きずり込んだのは、わしなのだ。

そのときの魔力の使いすぎで、わしは死んだ。

今のこの姿は機能的に不満はない。生き返っただけでもありえないのに、かつこ良さまで求めては高望みだろう。

自重じゆうじゆうした結果、わしは口を噤つぶむ。

そんなわしをよそに、タローはまたどうでもいい話を掘り下げ始めた。

「で、思うに年齢ってのは、肉体年齢を基準にするもんなんじゃないかなと」

「まだ続けるのかこの話題？ ……しかしなあ。わしの頭の中には現に五百年の蓄積があるわけじゃし」

わしはタローの意見に釈然とせず、物申してやった。

すると今度もやはり思いつきだろうが、タローはわしの年齢問題をはっきりさせる方法を提案してきた。

「それじゃあ……、魔法を使って調べてみるってのはどうだろうか？」

「む？ そうか。あの魔法なら調べようと思えば調べられるのかの？」

わしたちがよく使っている魔法に、解析魔法というのがある。

この魔法は、対象から情報を引き出せる。

これを使えば、年齢という概念にふさわしい情報をわしの身体から引き出すこともできるかもしれない。

「だろ!? 気になるよな!」

「いや、そんなに気になりはせんがのう」

「よし! それじゃあさっそく試してみよう! そうしよう!」

「おいおい」

タローはわしの意見を聞く気はないらしい。

ほとんど間もおかずに、タローが解析魔法をかけてくる。

結果がどうなるかと特に困ることもない。そう高をくくっていたのだが――。

「ウンブッフ!」

数秒して出てきた結果を見たタローは、鼻水を噴き出した。

「ど、どうしたんじゃ! 何があったんじゃよ!」

ここまで露骨な反応を見せられれば、わしも気になる。

思わずタローに詰め寄ると、必死に笑いをこらえている。

「い、いや、別に……。クククッ」

「絶対なんかあったじゃろ!」

肩を震わせているタローが、いったい何を見たのか?

タローが宙に浮かぶ画面をこっちに投げてよこす。書かれている内容を見て、わしは頬を引きつらせた。

結果発表



カワズさん 年齢三歳

「……さ、三歳!？」

「よ、よかったね……。ものすごい若返ったみたいで」

「いや! ……そりゃそうなんじゃが!」

どうやら解析結果では、魂よりも肉体年齢が優先されるようだった。



まあ……。本人たちが楽しそうなので問題ないのだろうが、とにかく魔法使いは魔法にのめり込むあまり、やらかすことがある。

そのやらかしてしまつた中には、太郎のように他の世界から無理やり連れてこられてしまったという例も含まれるだろう。

そもそも異世界人は高い魔力を持っており、だからこそ悲劇にも見舞われる。

高い魔力は戦いのために利用されるからだ。

この世界には、魔獣という恐ろしい生き物がいる。そして、その魔獣を操って人間へと差し向ける魔王という存在がいる。

これまで人間たちは、異世界人を召喚することでその脅威に抗ってきた。

過去において、魔王を倒した勇者もやはり異世界人だった。新たな魔王が出現するたびに異世界人は召喚され、彼らは勇者として魔王と戦い続けてきたのだ。

とはいえ勇者も人。必ずしも戦いたがる者ばかりではない。

だが、それでも戦い続けざるをえなかった。

異世界から来た人間を送り返すことはできない。知らない世界に放り出された勇者は、戦いから逃れることを許されない運命を背負うのである。

これもまた魔法使いがもたらす業の一つだろう。

しかし――。

その呪縛じゆばくを打ち壊した異世界人がいる。

彼女は勇者としてこの世界にやってきたが、最後まで望みを捨てずに元の世界に帰る方法を探し続け、それをついに成し遂げた。

皮肉なことに、勇者であるという呪いから逃れたその瞬間こそ、勇者としての輝きを一際放つていたと言えるだろう。

彼女は、金髪碧眼へまがんで異界の衣ころもをまとった美しい少女だった。



私、天宮マガリは白状する。

今、少し後悔している。

ちょっとした相談をするつもりで話しかけた相手に、こう切り返されたからだ。

「ん？ モデルになりたいのか？ すまないが、正規の手続きを踏んでオーディションを受けてくれないか？ どうしても言うのなら、他ならぬそなたほどの逸材だ。妾のコネでねじ込むこともできようが？」

「いえ、そういうことではないんですけど……」

「違うのか？」

妖精郷の女王様は、豊かな緑の髪の奥に見える切れ長の目で威圧してくるけれど、もちろん私はモデルに立候補したいわけじゃない。

この時点で、なんでこの人に相談しようと思ったのか、と自問自答する私がいいた。

だがしかし、太郎のことをよく知っていて人生経験が豊富。なおかつ同性の知り合いという条件で思いつくのは女王様しかいなかったのだ。

そう、いなかった。……と思うのだけれど。

私は迷いを振り払いつつ、一応相談事を打ち明けてみた。

「実は……、太郎についてなんですけど。なんとなく最近、変な視線で見てるなあと……、思い

まして」

私にとつての悩みの種、それは太郎のことだった。

私は彼の計らいで、地球とこの世界を行き来できるようになった。

しかし、それ以来どうにも、太郎との距離の取り方がわからなくなってしまったのだ。そして太郎のほうもこちらを気にしているらしいのをうっすらと感じていた。

私の悩みを聞いた女王様は、ピクリと片眉を上げて席を立った。

「ふう……、しばし待て」

「？」

下らない相談で呆れさせてしまったかと不安になったが、そうではなかったらしい。

女王様は、どこからかティーポットとお茶菓子のクッキーを持ってきて、テーブルの上に置いた。そして両肘をついてドンと構えると、キラリと目を輝かせて冷静な口調で言う。

「ん？ それはまた面白そうな話ではあるな」

「……」

ものすごく食いついた。

私は、女王様のあまりの腰の据え方に、ごくりと喉を鳴らしてしまった。

いや……、相談を持ちかけた私にしてみれば、とてもありがたいことなだけけれども。

それでも、嫌な予感しかない。

「え、えーっと」

「つまり、タローの腫が恋しちゃってるわけだな？」

「違います」

やはり意図しない方向に話が飛んでいってしまったので、ひとまず止めておいた。

すると女王様は、心底不満そうにする。

「なんだ？ 違うのか？」

「いや、その原因まではわからないので、いつも太郎の近くにいる女王様から見ても、何か心当たりはないものかと思ひまして」

「お前とタローのことなんだから、お前に心当たりがないなら、妾にあるはずがないだろう？」

「それはそうなんですけど」

目は口ほどにものを言うというけれど、太郎の目を見ても気持ちまではわからない。きっと何か思うところがある、わかることといえればそれくらいのものだった。

女王様はしばし私を観察し、「うむ」と深く頷くと、人差し指をくいつと立てて言う。

「わかった、ひとまず立つがいい」

「え？ どうしたんですか？」

意味がわからないまま立ち上がる私に、女王様は真剣な顔で言った。

「ではまず、ファッションチェックからだな？ しかしなんだその格好は？」

「え？ えっと、変ですか？」

やっぱり関係ない話題になってる！ と思ったが、いきなりだめ出しされれば私だって気にはなる。ちなみに今日はジーンズにピンクのパーカー姿だが、女王様にその格好はまったく気に入らないらしい。

「ああ、大いにな。異性の目を気にするのならなおさら不満だ！ もっと肌を出していかがか。色香とは肌色から出るものだぞ？」

「それ、暴論すぎませんか？ それに視線は気になるとは言いましたが……」

私は話の方向を修正しようとしたが、女王様から手のひらを突き出されて止められてしまった。

「黙るのだな、小娘よ。健全な人間の男ならば女が視界を横切れば目が行くものだ。それが美しければなおさらだろう？ 第一印象とはつまりきつかけだ。だがスベックの良さに胡坐をかいては自ずと限界というものがあるのだからな？」

「だから……、そういう話ではなく」

「いいや、そういう話だ。妾にはわかる」

「……そうなんですか？」

もはや何を言ってもだめそうだ。

女王様がやけに自信たっぷりな断言するものだから、私も思わず納得しそつになっちゃった。しかしどうにも誤解がある気がして、何とか情報を多くしようとかんばった。

「ええっと変な意味ではなくてですね。なんというか、含みがあるというか、未練がましいというか。うまく言えないんですけど……、どうにも何か言いたいことがありますって感じなんです」

「何か言いたくて見てくるのか？ そっちのほうがよっぽど変だろう」

「まあそうなんですが」

女王様の指摘には、それもそうだと納得しかけてしまった。

ともかく、強引にまとめしてみる。

「えーっと、要約すると、やっぱりふとしたときに私を見ている太郎の視線が気になるという話なんです」

「まったく情報が増えておらんぞ。もっと具体的に何かないのか？」

「……すみません。私もどうしたものかわかりかねています」

自分でもおかしいとは思いますが、私だから感じる殺気？ とは言わないまでも、確実にネガティブな感情の混じった視線を感じるわけだ。

言葉を濁す私に女王様は不可解そうな顔だが、それでもしばし考えて、何かを思いついたように楽しい表情になる。

「ふむ、視線が気になると言うのなら、ちょっと待っておれ。いいものがあった」

「いいのですか？」

「うむ。男の視線を変えたいのだろうか？」

「……まあ、ざっくり言えばそうなのかな？」

やはりそっちの方向に持っていかれるかと私はどうとう諦めた。

女王様はいそいそと姿を消し、しばらくしてからにょろと床から現れた。その周囲にはヒマワリの花が咲いている。

花のチヨイスからして、ずいぶん機嫌がよさそうだ。

「では、これをお前にやろう。試してみるがいい」

女王様の手のひらに載っていたのは、銀色の小さな指輪である。

受け取って指で転がしてみたが、魔法の品であることくらいしかわからなかった。

「これは？」

女王様はふふんと笑って、指輪を指差した。

「この指輪は面白いぞ？、簡単に言えば、相手からの印象を変化させる魔法がかけている。

持っていればタローとて何かしらのリアクションは期待できるだろう。ひよっとすれば、そのリアクションからそなたの違和感の正体も見極められるかもしれない」

「……リアクションですか」

「そうだ。感情の起伏を読み取るなど造作つくさもなからう？、男なんぞ目配せの一つでもくれてやれば簡単にぼろを出すというものだ、お前の色気の見せどころだぞ？」

「色気ですか……。ハハハ」

私はもう一度手の中にある指輪を眺めて、眉をひそめた。

相談をしておいてなんなのだが、控えめに言っても心配だ。

「妾とて、あやつを考えなどまるで見当もつかん。まあ気休めだ、使ってみるのもいいだろう」
だがまあ、女王様の言うことももつともだとも思っ。

近くにいたって遠くにいたって、太郎の考えていることなんてわかるわけがない。

結局のところ今回の悩みだって、わずらわしく思われていたらどうしよう？ という私の心配が根本にあるような気がしていた。

結局気になるなら本人に尋ねてみるしかないし、それが嫌なら本人の態度から読み取るしかないのだ。

「ありがとっございます……」

私は頭を下げて礼を言っつと、何とも言えない気分ではあつたけれど、そのまま部屋を出た。

そんな感じで考え事をしていたので、女王様がポツリと言つた次の言葉なんて私の耳にはまつたく届かなかつたわけだ。

「……ああ、そうそう。ちなみにそのアイテムはタローが作つたものだからな、そういう意味では効果のほどは期待していい」

指輪はさすが魔法の品だけあつて、指にはめるとぴつたりのサイズに勝手に収まつた。

印象を変えるという話だつたが、漠然としすぎてどんな効果があるのかまるでわからない。

自分の指にはまつた指輪を眺めてみても、何か変化したようには思えなかつた。

「さて……、どうなるかな？」

女王様がくれた魔法のアイテムだけに、見た目に関する魔法だろうとは思つ。

不安はあるけれど、元々何の手立てもないのだから、何か打開策につながるかもしれない。

「そつたよね。まあ、何事も試してみるのさ大事だ」

何が起つても驚かないように心の準備をしつ、私がまず行つたのは、自分の姿の確認だつた。
女王様のお城にはいろんなところに姿見が設置されている。

さつそく鏡に映つた自分の姿を見て、もつた指輪の効果を理解した。

「服が変わつてる？ でもなんでドレスなんだろう？」

私の格好は、いつかのシンデレラの一件で着たことがある、真っ赤なドレス姿に変わつていた。
今すぐ舞踏会にでも行けそつな格好なので、違和感がすごい。

そのくせ着ている感覚は、ジーンズとパーカーのままなんだから、妙な気分である。

どうやらこの指輪は、はめるとドレスアップする効果があるらしい。

私はすつかり変わった自分の格好を見て、ため息をついた。

「要するに、身なりを整えて印象を変えろつてことかな？ これはまたすいぶん直接的な……」
そりゃあ、相手の態度も変わるだろう。

何せ見た目がここまで変わっているのだから。

自分が求めていたものとは違ったが、そもそも女王様に太郎の変化について思い当たるところがなかった時点でどうにもならない話だ。女王様も骨を折ってくれたほうだろう。

ともかく、服が変わったくらいなら太郎にも見せてみようと思う。期待通り何らかのリアクションがあればいいし、なければそれで終わり。

肝心の気になるところは、折を見てまた何らかの手段で問いただせばいいだろう。

「まあ、そんなところだよね」

私は気を取り直して、太郎の家に向かうことにした。

太郎の家にたどり着くと、カワズさんが庭先で妙な踊りを踊っていた。

カワズさんが中国拳法をやっていることは聞いていたけれど、すでに完璧らしく、動きに一切の淀みがない。

上半身裸のカワズさんは、ますますただの蛙っぽくて、なんだか声をかけづらい。

そうして迷っている間に、カワズさんのほうから話しかけてきた。

「おう。来ておったのか。どうじゃ？ 転移魔法の具合は」

「どうも。おかげさまですぐ助かっています。こっちの世界のほうが強なんかもしやすくて、ついついこまめに来ちゃうくらいです。静かだし気候もいいから」

タオルで汗を拭きつつ休憩を入れるカワズさんは、私の返答を聞きながら周囲を見渡して頷く。

「ふむ。それもそうか。ここより快適な場所はなかなかなからうのう」

「でしょ？ 時間もある程度調整が利くっていうのもすぐ助かって。こっちはズルっぽいけど」

太郎から世界を歩き来できるアイテムをもらっているのだから、ここに来るのにはそんなに手間はかからない。それに、数日くらいなら時間を調整することもできた。

試験勉強のための時間を作るにしても、リラックスする時間を作るにしても、何かと便利なのだ。少し前まで、心の余裕を奪っていた場所が、今こうしてまったく真逆の場所になっているのだから、わからないものだ。

カワズさんは、ズルっぽいと言った私に首を振っていた。

「いや。そういう利点は活用すべきじゃろう。そもそも失った時間はこちらの世界の都合なんじゃからな。気にせず好きに使えばええわい。……ところでお前さん、今日はいい感じの衣装じゃのう。その格好で出歩くのはどうかと思うが」

「あ、……そっか。この格好じゃ変ですよ」

カワズさんが突然、私の格好を指摘してくる。いい感じの格好と言われると、悪い気はしない。そういえば私は今、ドレス姿に見えているんだった。

着心地は変わっていないから忘れてしまっけれど、この場にドレスでは、そりゃあ変だろう。

頬を赤らめた私に、カワズさんは汗を拭きつつ謝った。

「ん、まあ着る物くらい個人の自由じゃけどな。わしもいらんことを言ったわい」
どうやら気を遣わせてしまったみたいだ。

「いえいえ。ところで太郎っていますか？」

ここは早々に用事を済ませるべきだと思って、私は太郎の居場所を尋ねた。
するとカワズさんは家のほうに視線をやって親指で指し示す。

「ん？ ああ、中でスケさんと何かしておったか？」

「じゃあ私は、少し彼に話があるので」

「うむ。ゆっくりしていけ」

挨拶もそこそこに、慌てて太郎の家に入る。

ただ部屋に入る寸前、カワズさんのぼそりと呟いた言葉が耳に入った。

「しかし、……アレがチャイナドレスというものか？ 普段着でもいけるんじゃないか？ 切れ目が入りすぎじゃろ」

(チャイナドレス？)

何のことだろう？ いったい。

意味はわからなかったが、確かめに戻るのも気が引けて、私はそのまま太郎を探した。

「なんだこれ？」

太郎の家に入ると、ピンク色の布が床に散乱していた。

リビングでは、大柄の男の人と太郎が一心不乱に針を動かしている。彼らは布地をチクチクと縫い合わせ、一生懸命何かを作っているようだった。

入ってきた私に気がついたのだろう、大柄の男の人が作業を続けながらも話しかけてきた。

「ん、お客さんですか？ いやはや散らかしてすみません。少々慣れない作業をしているもので。……この匂いはセーラー戦士殿ですか？」

彼はおそらくスケさんだ。

本来の姿は見上げるほど大きな黒い竜のはずだが、今は短く髪を切りそろえたかっこいい感じの人間の男性に姿を変えている。

何をどう間違ったら、あの^猛猛な竜がピンクの布にまみれて裁縫をすることになるのかわからないが、本人は真剣みだった。

そしてもう一人。太郎もやはり真剣にピンクの布に針を通していた。

太郎の手つきは妙に洗練されていて、スケさんに比べて倍ほどの速さなのが見て取れた。

針仕事も上手なんだな。やっぱり女子力高い。

だがここまで来ると、むしろ女子力というより職人芸のような気がした。

「おお、ちょっと待ってて、もうちょっとでキリがつくから。そしたらお茶でも入れようか」

太郎は反応は示してくれるものの、顔は上げない。
「二人で何してるの？　なんだか甲斐甲斐しいけど」

「いよいよ気になった私は、好奇心で尋ねてみた。」

「どうやら作業は佳境のようだが、何をそんなに必死に作っているのだろう？」

我慢できずに覗き込むと、スケさんは忙しそうだったが、太郎のほうには若干余裕があるのか、何を作っているのか教えてくれた。

「あー、あれだよ。新団員用のハッピを作ってるんだ。ここには生地がたくさんあるからね」
そう言いながらピンク色の糸をすいすい布に這わせて、服の形にしていく。

「ああなるほど、あのアイドル関係のやつか。」

納得したけれど、どうにも深くは踏み込めなさそう。

太郎が地球の娯楽をこちらでも広めようとかがんばっているのは少し知っている。アイドルの動画もその一つで、かく言う私も、旅をしていたときは動画を使わせてもらった。

そしてどうやら、その騒ぎの手伝いにスケさんが駆り出されているようだ。

童なのに人間のアイドルに興味あるなんて変だな？　と思ったが、きつと太郎に巻き込まれたんだらうと見当をつけた。

「私一人でやるうと思っていたのですが、タロー殿が見かねて……。いやはや面目ない、しかし団長としてはこれくらいのこと、やらないわけにはいきませう！」

「ただ、スケさんはものすごく気合が入った宣言をする。」

訂正、どうやら彼のほうがこの騒ぎの中心人物みだった。

声を弾ませるスケさんは本当に楽しんでるようで、趣味はこうやって人生を豊かにしていくんだなーと思っただ。

「アイドルに関してはあまり理解できないけれど、趣味とはそもそもそういうものなんだろう。」

「じっと見ていたら、ちょっとした疑問が生まれた。」

「わざわざ手で縫わなくても、魔法を使ったほうが楽なんじゃないかな？」

話のタネにそう言ってみたが、太郎がこれを否定する。

「作る数少ないし、これはこれで別に楽しいし？　だいたい最近すること多くて、こういうのに魔力使うくらいなら新しいパソコン作る」

「ああ。優先順位はそっちが上なんだ」

「それはそうでしょう。あれは魔力がないとできないし」

なるほど。太郎ほどの魔力を持っていても、余裕はそんなにないということか……。

それってどれだけ魔力使ってたんだよ！

私は何か釈然としなかったけれど、本人が言うのならそうなのだろう。

作業を邪魔するのも悪いので黙って完成を見守っていると、数分もしないうちに太郎がハッピを持って立ち上がった。

その三十秒後くらいにスケさんが完成したようだった。

「はっはっはー。俺の勝ち」

「ぬぬぬ……。ハンデ付きだったのに、さすがに悔しい」

どうやら二人は、どちらが先に完成させるか勝負していたらしい。

勝ち誇って笑顔の太郎と洗面のスケさんが顔を上げて、お互いに出来上がったハッピを私に見せようと振り返ったが――。

私を見たとき、二人の表情は激変した。

「ぬほ！ こいつはいったいどういうことですか！ 何かのハッピーイベントとかですか！ ハッピだけに！」

「おお！ 今日はセーラー戦士じゃないか！ やっぱいいもんじゃないかセーラー戦士！ 最近着ているのってセーラーでも、戦士でもないから、もうなんだか寂しくて！ せっかく確立したキャラなのにもつたいないなーって思ってたんでしょよ！」

「ん？」

スケさんは顔を真っ赤にしている。一方太郎は、頬を桜色にして大興奮だ。

あまりのテンションの上がりっぷりに、一歩引いてしまったほどだが、彼らの意味のわからない発言は耳に残った。

「……え？ 何それ？」

私は今、ドレスを着ているように見えていのではないのか？

その姿を見せて、そこそこ驚かれて、女王様にもらったのだと説明して……。と話のきっかけにするくらいのもりだったのだが。

二人のリアクションは少々度を越していた。

「え！ いいんですかその格好は！ 危険ではないですかね!？」

スケさんは鼻の穴から真っ赤な炎を噴いている。

やっぱり竜なんだなと思っただが、なぜ炎を噴いているのかまではわからない。

「えっと目が血走ってるんだけど……?」

戸惑う私は助けを求めて、視線を彷徨^{さまよ}わせる。すると、ようやく太郎も何かおかしいと気がついてくれたらしい。

太郎はぎっと私を見て、そして指に目を留めた。

「ああこれ幻系？ って、……まさか！」

ものすごく慌てて太郎は私の手を取る。

「な、なに？」

ドキッと胸が鳴る。

太郎の掴んだ私の手には、銀色の指輪が光っていた。

「え？ これ？ えっと……。女王様に貸してもらったんだけど」



たどたどしく事情を説明した私だったが、それを聞いた太郎の顔は蒼白になる。

「!! すまんスケさん！」

そこから太郎の動きは速かった。

大慌てでそこら中に散らかっているピンクの布に魔法をかけて、スケさんの頭から足の先までを拘束してミイラにしたのだ。

桜吹雪のように舞った布が、磁石に吸い寄せられる金属片のごとく次々と殺到すると、スケさんはピンク色の塊かたまりになる。

「ぬおおお！ 何事！」

もがくミイラの中からスケさんのうめき声が聞こえてきたが、完全に拘束できたのを確認した太郎はふうと額の汗をぬぐった。

「やれやれ、すまんスケさん。緊急措置だ、悪く思うな」

「悪く思いますよ！ そりゃあないでしょう！」

「いや！ でも本当にすまん！ だが、今君が見たものはすべて幻なのだよ！」

もがもが叫ぶミイラスケさんは、非難めいた声を上げていた。

状況が理解できず、私は目を大きく見開いたままである。

そんな私の手から、太郎は指輪を抜き取るとそのまま回収してしまった。

「やれやれ、女王様もやってくれる。まさかこいつを引っ張り出してくるとは」

太郎はその手に収めた指輪を眺めて呟く。
なんだかとても嫌な予感がある台詞に、私は胃が重くなるのを感じた。
このまま知らないほうが幸せとも思ったが、知らないほうがもっとまずそうだ。

「この指輪のこと、知ってるんだ？」

結局、私は尋ねた。

すると太郎は大きく頷いて、視線を彷徨^{さまよ}わせながら腕を組んだ。

「ああもちろん。こいつは俺が作ったやつだから」

「……そうなんだ」

そりゃあ、変な効果が付いていたとしてもおかしくはない。

なにせ、太郎作である。

思いつきで道具を作ることは定評のある太郎なのだ。

太郎は懐かしげにその指輪を眺めて、ため息をついた。

「そうだよ。あー……、そうだなあ」

「……？」

キョトンとする私に、太郎は難しい顔をしてうなり、そして質問をしてきた。

「ふむ、何と説明したものか。とりあえずそれ着けて、自分を鏡で見たとき、どんな服を着ているように見えた？」

「え？ 赤いドレスだよ。シンデレラのとくにもらったやつ」

意図はわからなかったが、私は正直に答えた。

すると太郎はなぜか驚く。

「……え？ そうなの？ これは予想外」

「なんなのいったい？」

いい加減じれてきた私が問い返しても、太郎の齒切れはいまいち悪い。

「あー、なんて言ったらいいかな？ 落ち着いて聞いてほしい」

「？ うん」

太郎はふるふる震えてしばしためらったが、結局、話し始めた。

「まあ最初に言っておくと、こいつは基本的にそんなに悪い魔法じゃない」

私を落ち着かせているつもりなんだろうけど、余計に不安になることを言う太郎。

「俺は一時期、服飾の魔法について研究していた時期があったんだけど。その指輪にはそのときに生まれた魔法がかけられていてね？」

「服飾の魔法ね。女王様が好きそうだよ」

「うん。手軽に最高の格好になれる魔法があったらいいなーって思って。でも、ほら。いちいちデザイン考えたりするのって大変だろ？ それに魔法使いっぽくないから一瞬でほしい！ て格好を変えられたらいいなっと思ったんだよね」

「一瞬で変わるのたまにやっつけないかな、太郎は？」

私の記憶では、格好を変えるくらいは普通にやっていた気がするのだが、太郎は重々しく首を縦に振る。

「まあそういうのも、この研究から生まれたとそう思ってくれ」

「ああ。まあそうなんだろうね」

「でも、じゃあどんな姿にすればいいんだよって話になる」

そして太郎は、ずいぶん引つ張ったうえで、ようやく結論を告げた。

「俺が導き出した答えは三つだ。魔法を使う人間に合わせるか。服を着る人間に合わせるか。……それとも、その服を目にする周りに合わせるか。三つのうち、この指輪には周りに合わせる魔法をかけることにしたわけだ」

「……」

太郎の話を聞いて、私も結論にたどり着きつつあった。

だがそれと同時に、どうしようもなく身体が震える。

私は背中に汗が噴き出るのを感じていた。

そんな私に、太郎は言うのである。

「つまりそいつは、見た人間が思い描く最高の服になるんだよ。相手の好みに合わせて一番気に入っている服装になるってわけ」

「………というと？」

あえて問いただす。

私の視線は自然とスケさんに向いた。

「見せてくださいタロー殿！ 後生ごしゅうです！」

太郎も同じくスケさんを見ていて、ゆっくりと私に視線を戻すと、「残念ながら……」と口にして、首を横に振った。

「……まあ、スケさんの目にはエロい服に見えていても何の不思議もない。……のかもしれない」

「~~~~~！」

私の絶叫は、家の外まで響き渡った。

「私これ全然悪くないと思うんです……。むしろこういうのこそラッキースケベとして大きな心で許されるべきではないかと。私は選ばれたのですよ、エロの神に」

私の平手が、ろくなことを言わない竜に炸裂する。

太郎は友人の顔にできた平手跡を見て呟くように言った。

「そういうこと言うから怒られるんだろうに」

「ですか。まあそうなんでしょうね。次がんばります」

全然反省していないスケさんに、太郎も呆れていた。

「だけど私は、セクハラはよくないと思うから太郎に厳しいことを言っておく。」

「太郎も、欠陥があるってわかってる道具は処分しようよ」

「火照った顔をごまかし、若干怒っているふうにしていると、太郎は妙に熱を込めて言います。」

「モノづくりに失敗はつきものさー。だけど失敗したものだって作り手の思いは十分籠っているものなのさー」

「……言い方が胡散臭い」

「ですな、卑猥な企みがあったとしか思えません」

「私がじとつとした視線を向け、スケさんが確信をもって頷くと、太郎は心底慌てていた。」

「そんなことないし！俺ってば元々ものとか捨てられない人だし！」

「太郎は必死に言い訳を始めたけど、言えば言うほど、その慌て方が怪しかった。」

でも、今回のことで一番悪いのは、どう考えても私だった。」

そもそも太郎の視線が気になるなんて言いたさなければよかったのだ。」

スケさんにはどんな格好を見られたかわからないし、実は赤いドレスを気に入っていたこともばれてしまった。」

「そこまで考えていたら、頭に引かかっていたことを思い出した。」

「そこでひとまず私は最初の目的に立ち戻る。」

「そういうえば、私は女王様の狙い通り、太郎の動揺を誘うことには成功していた。」

私の服を見たときに太郎が言っていた台詞を思い出し、私はまさかと思つて太郎を見る。」

「ねえ、ちよつといい？太郎？」

「……あの。やっぱり僕もお仕置きでしょうか？」

「なぜか怯えている太郎だが、それは別にいい。」

「そんなことよりも、さっきの真意を確かめたい。」

「違うから。ところで最近の太郎ってさ、いつもあんなことを考えてない？あのセーラー戦士がどうとこかって」

「私がズバリ尋ねると、太郎の視線はサツとそらされた。」

「いや、……まあ。せっかくセーラー戦士ってあだ名を付けたのとか、セーラー戦士はキャラが立ってていいなあとか、そんなことは割と頻繁に……」

「……」

「これは間違いなさそうだ。」

「どうやら地球に戻つてからの太郎は、私の格好にずっと不満があったらしい。」

「ちよつと方向性は違うが、女王様のアドバイスがニアピンだったみたいだ。」

「私は事の真相にたどり着いたものの、思いつきり脱力していた。」

「なんだ、そんなことだったのか。心配して損した」

「え？何が？」

立ち読みサンプル
はここまで

「なんでもないよ」

「え？　なんかホント「ゴメンね？　怒った？」

謝られても、私はそっけなくしてそっぽを向く。

得心とくだんいってしまったが、安心したような、がっかりしたような、複雑な心境だ。

「でも、……一応、似合ってるとは思っててくれたんだ」

だけど私は、しょんぼりする太郎を見てそんなことを呟いた。

そして後日。

「どうしたの！　やっぱりセーラー戦士にしたのか！　……ん？　でも微妙にいつもと違う？」

「まあね。制服ふうファッションってやつかな？」

太郎が驚くのを見て満足しつつ、私は新調した服を見せる。

それは、私服をセーラー服ふうに改造したものだっただけ。

それに鎧を付けて、動き回ることを考慮してスパッツを穿はかせていただくことにした。

これで、せっかく本名で呼んでもらえることになっていた私の呼び名は、元のセーラー戦士に戻ってしまうかもしれない。でもそれについては粘り強く訂正していこう。私はそう覚悟を決めていた。



彼女は異世界での戦いを終えた。

だが、戦いを強いられる異世界人は彼女で終わりではない。

異世界人が大きな魔力を持つ限り、苦悩の連鎖は尽きないのだ。

個人の扱える魔力には差がある。

操れる魔力差は戦力差となり、もちろんできることにも差が生まれる。

魔法使いといえどこの現実からは逃れられない。

優秀な魔法使いほど自分の限界に思い悩む。

だからこそ、異世界人召喚のような悲劇が生まれる。

それは魔法に隠れた、闇の部分だ。

魔法使いは、生まれながらの資質に思い悩み、時に道を踏み外す。

本当にそういうこともあるのだ。